

出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響

磯崎 三喜年*

I. 問題

1. きょうだい関係の認知

きょうだいとは、不思議な存在である。家族という緊密な関係の中で互いを意識し、さまざまなやり取りをしながら、影響を受けたり与えたりする。自己を映す鏡のようでもあり、類似と非類似、親密さと葛藤の入り混じった存在でもある。

きょうだい関係は、個人の社会化を促すとともに、対人関係の基礎を形作る上で重要な役割を果たしている。その意味で、個人の適応と密接に関わっている。しかし、家族関係の実証的研究において、親子関係や夫婦関係と比較してきょうだい関係の研究は少ないとされており、その理由として①きょうだい関係の軽視、②研究の困難さ、③間接的な影響の多さ、などがあげられている（白佐, 2006）。

少子化の進む今日的状況において、改めてきょうだいの持つ意味を問い直す必要がある。ここでは、その手始めとして、小学生から大学生が、きょうだい関係をどのように捉えているか、出生順位や性別、年齢段階などの視点から検討することにした。

きょうだい関係の認知については、例えば、福田・依田（1986）は、幼児期と児童期におけるきょうだい関係認知の発達的变化を検討している。そして、男女および出生順位による違いを見出している。では、人は、児童期から青年期にいたるまで、自らのきょうだいの存在をどのように受け止めているだろうか。また、きょうだいとの関係において自己をどのように捉えているだろうか。

* 国際基督教大学教養学部教育学科教授。

きょうだい関係の研究を展望した白佐（2004）によれば、きょうだい同士の関係は、幼少期から高齢期まで発達的に変化し、発達段階の各時期において異なった関係を形成すると想定される。そして、これらの変化のプロセスや各段階の特徴を明らかにするような研究は、まだほとんどなされていないと指摘している。その意味で、各発達段階あるいは各年齢段階におけるきょうだい関係の特徴とその変化のプロセスを明らかにすることは、きょうだい関係の研究のひとつの課題であると思われる。

きょうだい関係をどう捉えているかは、きょうだいの出生順位によっても異なると考えられる。また、人は、きょうだいの関係、およびその意味を、必ずしも肯定的に捉えているとは限らない。さらに、人が、自己をどう捉えているかについても、自己と密接に関わる他者としてのきょうだいやきょうだい関係によって影響を受けると考えられる。

一般には、きょうだいの存在を肯定的に受け止め、冷静にそのよさを認めることができるようになるためには、ある程度の年齢に達するとともに、一定の心理的成熟が必要になるとと思われる。

さらに、白佐（2004）は、現代日本においては、長幼の序や男尊女卑の思想が衰退したとはいえ、きょうだいの序列や男女差が、きょうだい間の関係に影響を及ぼしていることがまだまだ多いのではないかと述べている。こうした視点からも、児童期から青年期にいたる、あるいはさらに成人期や老年期にいたる、さまざまな発達段階におけるきょうだい関係の特徴や、きょうだい間の捉え方を検討していく必要があるといえよう。

確かに、わが国においては、たとえそれが薄れたとはいえ、長幼の序という言葉に示されるように、きょうだい間の序列を重んじる風潮もある。その意味では、長子とそれ以外とで違った心理的メカニズムが作用する可能性があり、それがきょうだい関係や自己に対する捉え方に影響を与えている可能性がある。特に、幼少期から小・中学生ぐらいの時期までは、長子とそれ以外、あるいは相対的に年上のきょうだいと年下のきょうだいとの精神的および身体的な差異は、かなり大きなものがあると思われる。磯崎（2006）の小・中学生を対象とした研究でも長幼の序的傾向は示されている。

長子は、概して能力、知力そして体力などで第二子以下に優越していることが多い。それに対し、下の子は、小・中学生段階から、高校生・大学生と年齢段階が上がるにつれ、心理的な成長とともに、自分なりの方向や志向性を模索していくと考えられる。

また、相対的にその影響力は小さいにせよ、長子の方も、次第に第二子以下の影響も受けるようになると推測される。その意味で、きょうだい関係について、小・中学生だけでなく、より年齢段階を広げ、高校生や大学生など青年期まで含めた検討が必要となる。

2. きょうだい関係における自己評価維持

Tesser (1980) は、家族力動に見られる自己評価維持のメカニズムを検討している。自己評価維持のメカニズムとは、人は、自己評価を維持しようとする存在であること、そして、自己評価維持は、以下の2つのプロセスによって成り立つ心理的な働きをいう。ひとつは、人は、心理的に近い他者の優れた遂行によって、自己評価が上がるプロセスで、これを反映過程という。優れた他者との結びつきが心地よく感じられるのは、この反映過程にあたる。他のひとつは、心理的に近い他者の優れた遂行によって、自己とその他者との比較が起こり、自己評価が下がるプロセスである。これを比較過程という。このいずれのプロセスが生起するかは、心理的に近い他者の遂行領域が、自己にとってどの程度重要であるか、あるいは関わりをもつか（これを関与度という）による。関与度が低いときは、他者の遂行は自己にとって好ましいものとなり反映過程が生起する。つまり、自己評価維持に好都合となる。しかし、関与度が高いとき、他者の優れた遂行は、自己を脅かし、比較過程を生起させる。結果として、自己評価を低下させる。これは、自己評価維持を阻害することになるため、人は、反映過程を生起させつつ、比較過程が生起しないよう認知的、行動的調整を図ることになる。これが、自己評価維持の基本的な考え方である (Tesser, 1984)。

Tesser (1980) の研究では、きょうだい関係や親子関係における自己評価維持の検討がなされている。そして、3歳以内の比較的年齢差の小さいきょうだい間では、自己評価維持モデルの予測に沿った結果が得られている。しかし、年齢差が大きいきょうだい間では、モデルの予測は支持されていない。その意味で、全体としてみると、きょうだい関係において、自己評価維持の考え方が当てはまるかどうかは検討の余地を残している。

ところで、磯崎・高橋 (1988, 1993) や磯崎 (1994) は、友人関係における自己評価維持のメカニズムを検討している。そして、関与度の領域として、学校での教科における実際の学業成績を取り上げた場合、自己評価維持モデルに基本的に合致した結果が得られている。しかし、関与度の領域として、さまざまな学校関連活動を取り上げ

た場合（磯崎, 1994）、自己評価維持モデルに合致した結果は得られていない。むしろ、親密な関係にある友人を、自己にとって関与度の高い活動においても、高く評定する傾向が見られる。同一の回答者が、ある測度では、自己評価維持に合致した結果を示し、他の測度では、そうでない結果を示すということは、取り上げた関与度の領域によって、自己評価維持のメカニズムが強く作用する場合とそうでない場合が併存することを示唆している。

いずれにせよ、関与度の領域が、包括的、一般的なことがらであり、その遂行レベル（出来具合）を明確な基準によって捉えにくい場合、しかも、心理的に近い他者との結びつきが極めて強いときには、自己評価維持とは異なる心理機制、すなわち他者との調和的な関係を志向した関係性維持の心理機制（磯崎, 2004 参照）が生起する可能性がある。きょうだい関係は、心理的な結びつきの強い関係であり、出生順位による長幼の序といったきょうだい間の序列が作用する余地があること、また性によってさまざまな影響を受ける可能性のあることは、白佐（2004）の指摘するところでもある。

したがって、本研究では、年齢段階を小学生から大学生まで広げ、きょうだい関係の認知と自己ときょうだいに対する捉え方の変化を出生順位や、性の要因などを考慮し検討することにしたい。また、合わせて、きょうだい関係に自己評価維持の考え方が当てはまるかどうか、友人関係との違いも踏まえ検討を加えたい。本来きょうだい関係は、きょうだいの人数そのものによって、また、長子、中間子、末子などきょうだいの位置によって、さまざまな影響を受けられる。しかし、上述したように、参加対象者の年齢段階を広げ、そこでの出生順位と性の要因などを考慮すると、三人きょうだいあるいはそれ以上のきょうだい関係を取り上げ論じることは、データ数の問題もあり、現実にはかなり困難となる。そのため、ここでは、対象となるきょうだい関係を、二人きょうだいに限定して検討を行うことにする。なお、小学生、中学生の二人きょうだい関係はすでに検討している（磯崎, 2006）。そこで、ここでは、高校生、大学生のデータを加えて、上述した観点から検討を行うことにする。したがって、小・中学生のデータは、磯崎（2006）を共用している。

II. 方法

調査対象者 公立の小学生 179 名（男子 82 名、女子 97 名）、公立の中学生 99 名（男子 51 名、女子 48 名）、公立の高校生 58 名（男子 19 名、女子 39 名）、国立の大学

生 75 名（男子 30 名、女子 45 名）であった。なお、これらは、すべて二人きょうだいで、基本的な分析に必要な回答を満した有効回答者の人数である。

質問項目 まず、「あなたのきょうだいについておたずねします」として、回答者の属性（性、年齢など）、きょうだいの人数（何人きょうだいであるか）、回答者自身はその何番目にあたるかを尋ねた。また、きょうだいのうち、誰を対象として、以下の質問に答えるかを尋ねた。ここでは、二人きょうだいのみが分析対象になっているため、回答者は、自分以外のもう一人のきょうだいについて回答した。その際、回答者は、自分との関係（例えば、「兄」、年齢は「15 歳」）を明記した上で、その後の質問紙に回答した。なお、質問項目の内容は、小学生から大学生まで、基本的に同じであったが、小学生を対象とした質問項目については、理解が難しいと思われる表現を平易なものに改め、また漢字をひらがなに変えるなどの修正を行った。

項目は、まず、きょうだいのうち、どちらが、①ものをたくさんもっている、②いろいろなことができる（能力がある）、③人気がある、④かっこいい（きれい）、⑤家の手伝いをする、⑥成績がよい、の 6 つの項目について 5 段階評定を求めた（「1：ぜったいきょうだいの方」から「5：ぜったい自分の方」）。したがって、「3」は、自分ときょうだいと同程度（中間値）であることを示している。

また、これら①から⑥の項目のうち、「あなたのきょうだいに負けたくないと思うだいなもの」を回答者に尋ね、それを順に 2 つ挙げさせた。ここで挙がってくる項目を、回答者にとっての高関与項目とした。また、「あなたのきょうだいに負けても別にかまわないと思うもの」も順に 2 つ挙げさせた。これを、回答者にとっての低関与項目とした。同様に「あなたのきょうだいだったら」、これらのうち、「どれに負けたくないと思うか」を推測させ、順に 2 つ挙げさせた。これを、推測高関与項目とした。また「あなたのきょうだいだったら」、これらのうち、「どれに負けてもいいと思うか」を推測させ、同様に順に 2 つ挙げさせた。これを推測低関与項目とした。ただし、これら高・低関与項目や推測高・低関与項目の質問（「負けたくないと思うだいなもの」、「負けても別にかまわないと思うもの」）については、「なければ書かなくてよいです」と明記し、回答の強制を避けるようにした。

さらに、きょうだいとの関係や、きょうだいをどう思っているかについて、以下の 14 項目に 5 段階評定（「1：ネガティブ」から「5：ポジティブ」）を求めた。①勉強や運動などのできぐあいがどのくらい似ているか（出来具合の類似性）、②いろいろな行動の仕方の類似性、③ものの考え方や感じ方の類似性、④興味や関心の類似性、

⑤きょうだいが自分に対し、興味や関心を示したり、手伝ってくれる程度（関心・支持）、⑥競争する程度（競争）、⑦きょうだいが好き、⑧きょうだい仲のよさ、⑨一緒に行動したい程度、⑩一緒だと楽しい、⑪話をしたくない、あるいは顔をみたくないと思う程度（回避）、⑫けんかする程度（けんか）、⑬きょうだいがいないとさみしい、⑭よく話したり一緒に遊んだりする程度。

したがって、競争、回避、けんかの程度の3項目のみ、数値が小さいほどポジティブであることを示している。つまり、数値が小さいほど、競争や回避、けんかの程度が小さいことになる。

手続き 小学生、中学生、高校生については、基本的に、クラスごと集団で一斉に質問紙を配布し、回答を得た。ただし、時間の関係で、回答が困難な場合は、後日改めて回収を行った。大学生は、クラスで配布した場合と、個別に回答を依頼した場合があった。

なお、質問への回答は、三人きょうだい以上のものもあったが、ここでの分析は、二人きょうだいのみについて行った。

Ⅲ. 結果

分析に必要な基本的な回答を満たした二人きょうだいの有効回答者について分析を行った。なお、回答者の属性は、小学生の第一子は85名（男子37名、女子48名）、第二子は94名（男子45名、女子49名）であった。中学生の第一子は45名（男子17名、女子28名）、第二子は54名（男子32名、女子22名）、高校生の第一子は39名（男子17名、女子22名）、第二子は19名（男子9名、女子10名）、大学生の第一子は48名（男子12名、女子36名）、第二子は27名（男子12名、女子15名）であった。また、対象となるきょうだいの性は、男子186名、女子225名であった。

1. きょうだい関係の認知および自己ときょうだいに対する評定について：多変量分散分析の結果

きょうだい関係および自己ときょうだいに対する評定について、年齢段階（小学生、中学生、高校生、大学生）、きょうだいの性（男子、女子）、回答者の性（男子、女子）、出生順位（第一子、第二子）の多変量分散分析の結果、年齢段階別の主効果（ $F(72, 1065) = 3.06, p < .001, \text{Wilks' Lambda} = .57$ ）、きょうだいの性（ $F(24, 356) = 3.23, p < .001, \text{Wilks' Lambda} = .82$ ）、回答者の性（ $F(24, 356) = 4.85, p < .001, \text{Wilks' Lambda} = .75$ ）、出生

順位 ($F(24, 356) = 12.99, p < .001, \text{Wilks' Lambda} = .53$) の主効果が見られた。また、きょうだいの性と回答者の性の交互作用 ($F(24, 356) = 3.20, p < .001, \text{Wilks' Lambda} = .82$)、年齢段階ときょうだいの性および回答者の性の交互作用 ($F(72, 1065) = 1.37, p < .05, \text{Wilks' Lambda} = .77$) が有意となった。

2. きょうだい関係の認知

(1) 年齢段階別に見たきょうだい関係の認知

表1に示すように、1変量検定の結果、「競争」、「きょうだいが好き」、「きょうだい仲のよさ」、「きょうだいと一緒に行動したい」、「けんか」の各項目が有意となった(それぞれ、 $F(3, 379) = 9.02, p < .001, F(3, 379) = 4.42, p < .01, F(3, 379) = 5.74, p < .01, F(3, 379) = 10.16, p < .001, F(3, 379) = 16.70, p < .001$)。

表1 年齢段階別きょうだい関係認知の平均値 (標準誤差)

	小学生	中学生	高校生	大学生	F値
競争	3.01 (.09)	2.88 (.12)	2.32 (.17)	2.30 (.15)	9.02***
きょうだいが好き	3.49 (.07)	3.21 (.09)	3.50 (.14)	3.75 (.12)	4.42**
きょうだい仲のよさ	3.19 (.07)	2.99 (.10)	3.43 (.14)	3.62 (.13)	5.74**
きょうだいと一緒に行動したい	3.22 (.07)	2.62 (.10)	2.67 (.14)	2.75 (.12)	10.16***
けんか	3.59 (.08)	3.61 (.11)	2.80 (.16)	2.65 (.14)	16.70***

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p < .001$, ** $p < .01$

「競争」は、小学生と中学生は、高校生や大学生より、きょうだいと競争すると答えている(小学生は、高校生、大学生との間でそれぞれ $p < .01, p < .001$ 、中学生は、高校生、大学生との間でいずれも $p < .05$)。

また、大学生は、中学生よりも「きょうだいが好き」と答えている ($p < .01$)。「きょうだい仲のよさ」は、大学生は、小学生、中学生よりもきょうだい仲がよいと答えている(それぞれ、 $p < .05, p < .01$)。高校生と大学生では有意差はみられない。逆に、「きょうだいと一緒に行動したい」は、小学生が最大で、中学生、高校生、大学生よりも有意に高い(中学生、高校生、大学生との間でいずれも $p < .01$)。

「けんか」の程度は、「競争」と同様、小学生と中学生が、高校生、大学生よりもけんかをすると答えている(小学生、中学生いずれも高校生、大学生との間で $p < .01$)。

(2) 出生順位別に見たきょうだい関係の認知

表2に示すように、1変量検定の結果、項目別に見ると、「関心・支持」、「けんか」の項目が有意となった。長子の方が、きょうだいが自分に対し興味や関心を示し、手伝ってくれる、と回答している ($F(1, 379) = 4.75, p < .05$)。また、長子は、次子よりもきょうだいとけんかをする、と捉えている ($F(1, 379) = 5.41, p < .05$)。

表2 出生順位別きょうだい関係認知の平均値 (標準誤差)

	第一子	第二子	F値
関心・支持	2.79 (.09)	2.50 (.10)	4.75*
けんか	3.31 (.08)	3.02 (.10)	5.41*

注：数値は推定周辺平均を示す、* $p < .05$

(3) 回答者の性別に見たきょうだい関係の認知

表3 回答者の性別きょうだい関係認知の平均値 (標準誤差)

	男子	女子	F値
考え方や感じ方が似ている	2.38 (.10)	2.85 (.09)	13.32***
興味や関心が似ている	2.48 (.10)	2.91 (.09)	9.75**
関心・支持	2.37 (.10)	2.91 (.09)	16.52***
きょうだいが好き	3.22 (.08)	3.75 (.07)	25.39***
きょうだい仲がよい	3.14 (.08)	3.48 (.08)	8.76**
きょうだいと一緒に行動したい	2.53 (.08)	3.10 (.08)	24.52***
きょうだいと一緒にだと楽しい	3.07 (.08)	3.61 (.07)	24.69***
きょうだいがいないとさみしい	3.48 (.09)	4.17 (.08)	33.45***
話したり一緒に遊ぶ	2.90 (.09)	3.47 (.08)	21.87***

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p < .001$, ** $p < .01$

表3に示すように、1変量検定の結果、「ものの考え方や感じ方の類似性」($F(1, 379) = 13.32, p < .001$)、「興味や関心の類似性」($F(1, 379) = 9.75, p < .01$)、「関心・支持」($F(1, 379) = 16.52, p < .001$)、「きょうだいが好き」($F(1, 379) = 25.39, p < .001$)、「きょうだい仲がよい」($F(1, 379) = 8.76, p < .01$)、「きょうだいと一緒に行動したい」($F(1, 379) = 24.52, p < .001$)、「一緒にだと楽しい」($F(1, 379) = 24.69, p < .001$)、「きょうだいがいないとさみしい」($F(1, 379) = 33.45, p < .001$)、「話したり一緒に遊んだりする」($F(1, 379) =$

21.87, $p<.001$) の各項目が有意となった。いずれの項目も女子の得点が男子より高い。なお、きょうだい性別に見た場合、きょうだい関係の認知について有意な項目はなかった。

3. 自己ときょうだいに対する評価について

(1) 年齢段階別に見た自己ときょうだいに対する評価

表4 年齢段階別に見た自己ときょうだいに対する評価の平均値 (標準誤差)

	小学生	中学生	高校生	大学生	F 値
家の手伝い	3.26 (.09)	3.00 (.12)	2.71 (.17)	2.74 (.15)	4.83**
成績がよい	3.08 (.09)	2.66 (.12)	2.59 (.17)	3.48 (.15)	8.55***

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p<.001$, ** $p<.01$

表4に示すように、1変量検定の結果、「家の手伝いをする」、「成績がよい」で有意となった(それぞれ、 $F(3, 379) = 4.83, p<.01$, $F(3, 379) = 8.55, p<.001$)。

「家の手伝いをする」の項目では、小学生が、高校生や大学生に比べ、自分の方がきょうだいよりも手伝いをするかと答えている(いずれも $p<.05$)。小学生と中学生では、有意差はみられない。また、「成績がよい」の項目では、小学生は、中学生に比べ、自分の方がきょうだいよりも成績がよいと答えている ($p<.05$)。また、大学生は、中学生や高校生に比べ、きょうだいよりも成績がよいと答えている(それぞれ $p<.001, p<.01$)。中学生と高校生では差が見られない。

(2) 出生順位別に見た自己ときょうだいに対する評価

表5 出生順位別に見た自己ときょうだいに対する評価の平均値 (標準誤差)

	第一子	第二子	F 値
ものもち	3.59 (.08)	2.54 (.09)	82.35***
能力	3.64 (.07)	2.48 (.08)	128.71***
成績がよい	3.30 (.09)	2.60 (.10)	27.42**

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p<.001$, ** $p<.01$

表5に示すように、1変量検定の結果、「ものもち」($F(1, 379) = 82.35, p<.001$)、「能

力」($F(1, 379) = 128.71, p < .001$)、「成績がよい」($F(1, 379) = 27.42, p < .001$)の項目で、いずれも第一子が第二子よりも自分を高く評定していた。また、第二子は、これらいずれの項目においても評定値が中間値3を下回り、第一子の優越性を認めている。

(3) きょうだいの性別に見た自己ときょうだいに対する評定

表6 きょうだいの性別に見た自己ときょうだいに対する評定の平均値 (標準誤差)

	きょうだいが男子	きょうだいが女子	F値
ものもち	3.24 (.08)	2.89 (.08)	8.92**
能力	2.93 (.08)	3.20 (.07)	7.30**
家の手伝いをする	3.23 (.10)	2.63 (.09)	19.99***

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p < .001$, ** $p < .01$

表6に示すように、1変量検定の結果、「ものもち」($F(1, 379) = 8.92, p < .01$)、「能力」($F(1, 379) = 7.30, p < .01$)の項目が有意となった。男子のきょうだいを対象としたとき、回答者は、自分がより多くのものを持っていると評定している。逆に、女子のきょうだいを対象としたときの方が、男子のきょうだいを対象としたときよりも能力があると評定していた。また、「家の手伝いをする」($F(1, 379) = 19.99, p < .001$)については、男子のきょうだいを対象としたとき、回答者は、より自己を高く評定していた。

(4) 回答者の性別に見た自己ときょうだいに対する評定

表7 回答者の性別に見た自己ときょうだいに対する評定の平均値 (標準誤差)

	男子	女子	F値
能力	3.24 (.08)	2.88 (.07)	12.45***
かっこいい (きれい)	3.07 (.07)	2.80 (.06)	8.33**
家の手伝いをする	2.77 (.10)	3.09 (.09)	5.61*

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表7に示すように、1変量検定の結果、「能力」($F(1, 379) = 12.45, p < .001$)、「かっこいい (きれい)」($F(1, 379) = 8.33, p < .01$)の項目で、男子が女子よりも、自分を高く評定している。逆に、「家の手伝いをする」($F(1, 379) = 5.61, p < .05$)については、女子が男子よりも、自分を高く評定していた。

4. 関与度の高低別に見た自己ときょうだいに対する評定

高関与項目としてそれぞれの回答者が挙げた2項目に対する評定の平均、および低関与項目として挙げた2項目に対する回答者自身の評定の平均を、それぞれ高関与項目得点、低関与項目得点として分析に用いた。同様に、回答者が挙げた推測高関与項目2項目、推測低関与項目それぞれ2項目についての評定の平均を、それぞれ推測高関与項目得点、推測低関与項目得点として分析に用いた。

(1) 年齢段階別に見た関与度の高低別自己ときょうだいに対する評定

表8 年齢段階別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定の平均値 (標準誤差)

	小学生	中学生	高校生	大学生	F 値
推測低関与項目	3.10 (.06)	3.05 (.08)	2.73 (.11)	3.10 (.10)	3.09*

注：数値は推定周辺平均を示す、* $p<.05$

表8に示すように、1変量検定の結果、推測低関与項目の評定のみが有意となった ($F(3, 379) = 3.09, p<.05$)。小学生は、高校生よりも推測低関与項目において、高い評定をしていた ($p<.05$)。

(2) 出生順位別に見た関与度の高低別自己ときょうだいに対する評定

表9 出生順位別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定の平均値 (標準誤差)

	第一子	第二子	F 値
高関与項目	3.11 (.06)	2.86 (.07)	7.32**
低関与項目	3.15 (.06)	2.84 (.07)	10.86**
推測高関与項目	3.38 (.06)	2.66 (.07)	65.54***
推測低関与項目	3.24 (.06)	2.75 (.07)	31.70***

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p<.001$, ** $p<.01$

表9に示すように、1変量検定の結果、高低関与項目いずれの評定においても出生順位の効果は、有意となった (それぞれ、 $F(1, 379) = 7.32, p<.01$, $F(1, 379) = 10.86, p<.01$)。関与度の高低にかかわらず、第一子が第二子よりも、高い評定値となっている。また、推測高低関与項目いずれの評定も有意となった (それぞれ、 $F(1, 379) =$

65.54, $p < .001$, $F(1, 379) = 31.70$, $p < .001$)。推測高低関与項目いずれの評定においても、第一子が第二子よりも高い評定値となっている。

(3) きょうだいの性別に見た関与度の高低別自己ときょうだいに対する評定

表 10 きょうだいの性別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定の平均値 (標準誤差)

	男子	女子	F 値
高関与項目	3.21 (.07)	2.77 (.06)	22.78***
低関与項目	3.12 (.07)	2.87 (.06)	7.01**
推測高関与項目	3.12 (.07)	2.92 (.06)	4.64*

注：数値は推定周辺平均を示す、*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表 10 に示すように、1 変量検定の結果、高低関与項目いずれの評定においても有意となった (それぞれ、 $F(1, 379) = 22.78$, $p < .001$, $F(1, 379) = 7.01$, $p < .01$)。きょうだいの性が男子のとき、女子に比べ、関与度の高低に関わらず、評定値が高くなっていた。また、推測高関与項目の評定も有意となった $F(1, 379) = 4.64$, $p < .05$)。ここでも、きょうだいの性が男子のとき、女子よりも評定値が高くなっていた。

なお、回答者の性別では、関与度の高低別に見た自己ときょうだいに対する評定に有意な差は見られなかった。

IV. 考察

1. きょうだい関係の認知について

(1) 年齢段階別に見たきょうだい関係の認知

結果に示されるように、競争意識やけんかの度合いは、小・中学生に比べ高校生や大学生は低い。年齢段階が上になると、対人的世界が広がり、きょうだいとの競争心やけんかをコントロールできるようになると思われる。また、きょうだいの関心や興味が互いにより多様化し、それぞれが固有の世界を作り上げるようになると思われ。その意味で、競争的場面そのものが減少していくようにも思われる。これは、人間的な成長の表れでもある。特に、大学生では、小・中学生段階に比べ、きょうだい仲もよく、きょうだいが好きという回答も中学生に比べ高くなっている。児童期から思春期前半に高まる競争心やけんかなど、きょうだいとの葛藤が、大学生段階になる

と次第に解消され、それとともに、きょうだいの存在をより肯定的に捉える余裕が生じてきていると推測される。

(2) 出生順位によるきょうだい関係の認知

出生順位によって、有意差の見られた項目は、わずかであった。その意味では、出生順位によるきょうだい関係の認知には、予測していたほどの違いは見られない。第一子は第二子よりも、きょうだいが自分に対し、興味や関心を示し、手伝ってくれる(関心・支持)と見ていた。これは、年上であることによって、相対的に活動領域が広く、知識・経験も豊富であることに対し、年下のきょうだい(第二子)が関心を寄せ、かかわりを持つようとすることを示唆している。その意味で、第二子の方が、第一子に対し、模倣や接近を試みようとする度合いが強いように思われる。

その一方で、けんかの意識は、第一子の方が、相対的に強い。これは、第一子の方が、よりきょうだいの存在を意識し、ストレスを感じやすいのかも知れない。坪井ら(1987)の高校生を対象とした調査研究では、第一子に心身症状が見られがちであり、第一子が親からの期待や下からの圧力を感じ、ストレスを感じていることが示唆されている。本研究の結果も、部分的ではあるが、坪井らの結果と符合する面があるように思われる。

(3) 回答者の性別に見たきょうだい関係の認知

きょうだいの性別に見たきょうだい関係の認知には、顕著な差は見られないが、回答者の性別で見ると、きょうだい関係の認知にはいくつか差が見られた。すなわち、女子は、男子に比べ、考え方や興味・関心などきょうだいとより類似していると思われ、きょうだい自身が自分に関心を示し、手伝ってくれると見ていた。さらに、きょうだいとの関係(仲のよさ、一緒だと楽しい、一緒に話したり遊んだりする、など)をより肯定しており、女子のきょうだい関係の認知は、一貫して男子よりもポジティブなものとなっている。これは、女子の方が、概して親和性が高く、きょうだいとの関係をより調和的なものと捉える傾向のあること、またそうした関係を志向していることの表れでもあると思われる。

2. 自己ときょうだいに対する評定について

(1) 年齢段階別に見た自己ときょうだいに対する評定

「家の手伝いをする」の項目では、小学生が、高校生や大学生に比べ、自分の方がきょうだいよりも手伝いをするという回答している。年齢が上がると、手伝いをする割合は低下する。家庭内での役割が、高校生や大学生では、小学生と基本的に異なったものとなっている、あるいは高校生、大学生は、家庭内で果たす役割そのものが希薄になっている可能性がある。また、親と離れて生活している大学生などは、家の手伝いをする機会そのものがあまりないのかもしれない。いずれにせよ、子ども自身の方向性や親の期待などが、小学生と高校生や大学生では異なってきていることが示唆される。

「成績がよい」の項目では、小学生は、中学生に比べ、そして、大学生は、中学生や高校生に比べ、成績がよいと回答している。小学生より、中学生にとって学業成績がより厳しいものと感じ取られているのかもしれない。また、大学生は、相対的に小・中学生といくぶんサンプル特性が異なる可能性もあり、単なる年齢段階の側面だけで解釈することは適切ではないかもしれない。

(2) 出生順位別に見た自己ときょうだいに対する評定

有意差が見られた項目（能力、ものもち、成績）は、いずれも年上のきょうだいが自分を高く評定している。一般に、能力や成績は、概して年上に有利に作用しがちであると思われる。特に年齢段階が小さい場合、年上の優位は動かない。しかも、年下のきょうだい自身が、年上の優位性を認めており、きょうだい双方が、きょうだいの序列を肯定するような、いわゆる長幼の序的な捉えかたをしている。その理由として、白佐（2004）が指摘するように、現代日本においては、長幼の序や男尊女卑の思想が衰退したとはいえ、きょうだいの序列や男女差が、きょうだい間の関係に影響を及ぼしているのかもしれない。

また、これらの項目は、包括的、一般的な行動特性を示したものであり、特定の領域に関わる行動特性ではない。こうした項目の評定においては、明確な基準やものさしを当てにくい。結果として、概して優位な立場にいる第一子の方が、第二子よりも自己評定が高くなったのかもしれない。したがって、今後は、より客観的な基準が用いられやすい、特定の領域を取り上げて検討する必要がある。

逆に言えば、第二子にとっても、包括的、一般的な行動特性の評定においては、明

確な基準が当てにくく、第一子の優位性を受け入れやすくなったのかもしれない。こうした包括的な行動特定においては、優劣の意識は顕在化しにくいようにも思われる。また、評定によって、それほど強いネガティブな感情を抱くこともないかもしれない。すでに見たように、けんかの意識や、きょうだいが自分に関心を持ち、手助けしてくれると見なす度合いは、第一子の方が強い。つまり、第二子は、第一子の優位性を認めつつも、第一子との関係を必ずしもネガティブには捉えていないのである。この点も、上述した解釈の傍証となるかもしれない。

(3) きょうだいの性別および回答者の性別に見た自己ときょうだいに対する評定

男子のきょうだいを対象とした場合の方が、女子のきょうだいを対象とした場合よりも、回答者は、自分がものもちであり、より家の手伝いをしていると見なしやすい。また、女子のきょうだいを対象とした場合、男子のきょうだいを対象とした場合よりも、回答者は、自己の能力を高く評定している。このように、対象とするきょうだいの性によって、自己に対する捉え方が異なることが示された。

「能力」、「かっこいい (きれい)」の項目では、男子が女子よりも、自分を高く評定している。逆に、「家の手伝いをする」では、女子が男子よりも、自分を高く評定していた。これらの結果は、男子と女子に対する親や周囲の社会的期待 (男子への能力の高さ、女子への手伝いへの期待)、が作用しているように思われる。

3. 関与度の高低別に見た自己ときょうだいに対する評定

(1) 年齢段階別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定

年齢段階別では、関与度の高低による自己ときょうだいに対する評定に大きな違いは見られない。

(2) 出生順位別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定

結果は、自己評価維持モデルの予測とは異なり、第一子の優位性を強く示す結果となった。つまり、第一子は、関与度の高低に関わらず、自己の優位性を示し、逆に、第二子は、関与度の高低に関わらず、年上のきょうだいの優位性を認めていた。その意味で、きょうだい間の認知は一致していた。しかし、自己評価維持モデルの予測するようなきょうだい間のバランスは見られない。これは、Tesser (1980) で見られたきょうだい間における自己評価維持、および磯崎・高橋 (1988, 1993) で見られた友人

関係における自己評価維持の結果とは異なっている。

ただし、磯崎（1994）の研究では、関与度の領域として、学校での教科以外のより一般的な活動を取り上げた場合、自己評価維持モデルとは合致しない結果も得られている。つまり、こうした関与度の領域においては、関与度が高くても、友人を自己よりも高く評定していた。一般的な学校活動や、個人の特性などは、学校での教科の成績ほど、判断の基準が明確ではない。そのため、関与度の高さとその出来具合（特性を保持している程度）の評定、つまり自己評価とが、直接的には結びつかなかったかもしれない。本研究で取り上げた関与度の領域も、包括的、一般的なものであり、これと似た側面があったように思われる。この点は、推測高低関与項目でも同じであり、結果として、きょうだいに対する評価への配慮やきょうだいとのバランスを志向した評定が見られなかったと推測される。

いずれにせよ、第一子と第二子では、結果が対照的であり、第二子は、関与度の高低に関わらず、第一子を高く評定していた。それに対し、第一子は、関与度の高低に関わらず自己の優位性を強調しており、基本的に対等性を基盤とする友人関係の結果とはかなり異質なものとなっている。その意味で、きょうだい関係においては、きょうだいの序列意識を反映するような、いわゆる、長幼の序的な傾向が示されたといえる。

(3) きょうだいの性別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定

回答者の性別に見た関与度別自己ときょうだいに対する評定には、顕著な違いは見られなかったが、きょうだいの性別について見ると、関与度の高低に関わらず、きょうだい男子の場合、女子に比べ、評定が高くなっていた。自己評価維持の観点からは、きょうだいの性によって、どのような結果が予測できるかは明確ではないため、ここでは考察を控えたい。

以上、本研究においては、小学生から大学生を対象に、年齢段階や出生順位、性などの視点から、きょうだい関係の認知、きょうだい間における自己ときょうだいに対する捉え方を検討した。大学への進学率等を考慮すると、小学生から高校生までの結果と同列に論じることが難しい側面はあるものの、年齢段階や出生順位によって、きょうだい関係の認知やきょうだい内での自己の捉え方にいくつか違いが見られた。自己ときょうだいに対する捉え方の問題については、今後より詳細な領域を取り上げて検討することが望まれる。

参考文献

- 福田孝子・依田 明 (1986). 「ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係 (2) —幼児期・児童期におけるきょうだい関係認知の発達的变化」『横浜国立大学教育紀要』(横浜国立大学) 26号, 143-154頁.
- 磯崎三喜年 (1994). 「児童・生徒の自己評価維持機制の発達的变化と抑うつとの関連について」『心理学研究』(日本心理学会) 65巻, 130-137頁.
- 磯崎三喜年 (2004). 「子ども社会研究の可能性：子どもの心理学の立場から」『子ども社会研究』(日本子ども社会学会) 10号, 25-30頁.
- 磯崎三喜年 (2006). 「小・中学生の二人きょうだい関係に関する研究」『教育研究』(国際基督教大学教育研究所) 48号, 119-130頁.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1988). 「友人選択と学業成績における自己評価維持機制」『心理学研究』(日本心理学会) 59巻, 113-119頁.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1993). 「友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制」『心理学研究』(日本心理学会) 63巻, 371-378頁.
- 白佐俊憲編著 (2004). 「きょうだい関係とその関連領域の文献集成Ⅲ」東京：川島書店.
- 白佐俊憲 (2006). 「きょうだい研究の動向と課題」日本児童研究所 (編)『児童心理学の進歩 2006年版』東京：金子書房 57-84頁.
- Tesser, A. (1980). Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 77-91.
- Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In Masters, J. C. & Yarkin-Levin, K. (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. (pp.271-299). New York: Academic Press.
- 坪井真喜子・松本和雄・大月則子・渡辺 純・志水 彰 (1987). 「児童期・青年期の心身症状について (I) —青年期心身症状と同胞順位に関する考察」『大阪精神衛生』(大阪府立公衆衛生研究所) 32巻 (1～6合併号)、36-48頁.

謝辞：本研究のデータ収集に際して、高橋 超 前広島大学副学長の協力を、またデータ分析に際して、広島国際大学小野寺孝義教授の協力を得た。記して感謝します。なお、本研究は、ICU 21世紀 COE (研究代表 藤田英典教授) の補助を得た。

Effects of Birth Order and Sex on the Cognition of Sibling Relationships and Self-Evaluation

〈Summary〉

Mikitoshi Isozaki

The effects of birth order and sex on the cognition of sibling relationships and self-evaluation were examined. Participants were 179 (82 male, 97 female) public elementary school children, 99 (51 male, 48 female) public junior high school children, 58 (19 male, 39 female) high school students, and 75 (30 male, 45 female) national university students.

Questionnaires were administered to these participants who had only one other sibling in the family. Participants responded to some items related to their sibling relationships and the following questions: "How successful are you compared to your brother/sister in the following things: getting possessions, abilities/skills, popularity, appearance, helping with the household chores, getting good grades?" Each participant rated these items on 5-point rating scales (1: my sibling is far more successful ~ 5: I am far more successful). In addition, in order to measure relevance (the extent to which the other's performance is relevant to one's self-definition), each participant was asked to identify and rank those things that were the two most important and the two least important.

The results showed that high school students and university students perceived their sibling relationships more positively than elementary school children and junior high school children. Female respondents perceived their sibling relationships more positively than male respondents. First-born respondents rated themselves better than their siblings both on highly self-relevant areas and on less self-relevant areas. Second-born respondents perceived themselves more negatively both on highly self-relevant areas and on less self-relevant areas. Implications of these results are discussed.